

野菜の一生とつきあうということ

—岩崎政利さんが切り開いてきた世界—

佐藤 剛史

1 愛おしさでみつめる

岩崎さんは、ニンジンの種採り用ハウスの中で私と話している間ずっと、ニンジンの花をあやしていた。あやすとは、岩崎さんの地方の言葉で「種を採ること」の意味だから、正確には、花をあやすという使い方は間違っているかもしれない。しかし、お椀型に広がったニンジンの花を両手ですっぽりと包み、親指の腹で愛で続ける。その姿から、岩崎さんがニンジン^ニのその花をどんなに愛おしんでいるかが伝わってくる。さわるでも、触れるでも、撫でるでもなく、たしかにあやしていた。

次の畑に移動する。すると、畑の作業小屋の前にナスの苗が置かれていた。珍しいナスの苗である。岩崎さんの知人が持ってきてくれたものようだ。岩崎さんも予想しなかった苗との出会いに驚いている。そして、「いやー、すごいねえ。よく来たねえ」と、苗を愛おしむかのように語りかけた。

岩崎政利さんは1950年に長崎県に生まれ、諫早農業高校を卒業後に長崎県吾妻町(現雲仙市)で就農¹⁾。80年ごろから有機農業に切り替え、現在約2haの畑で約80品種の野菜をつくる。それらの野菜は、長崎市内の消費者グループを中心に、レストランや首都圏のスーパーなどにも出荷されている。特徴的なのは、野菜の自家採種、いわゆる種採りで、現在は約60種の種採りを行っている。

そんな種採りの技術、そしてそれを支える経営も、本当に興味深い。しかし、種を愛おしむ岩崎さんのそのまなざしの深さ、種採りの経験を通じてつかんだ哲学、岩崎さんが切り開いてきた世界を中心に、ここでは紹介しよう。

2 想いを受けとめる

エビソードがあふれる畑

岩崎さんに畑を紹介してもらっていてもまず感心したのは、植えられている野菜についてよく覚えていることだ。いつ、どこで、誰からその野菜を手に入れたか、一つ一つ説明してくれる。

それは、岩崎さんが、その野菜・種にこめられた歴史や物語、それを育ててきた人の想いといっしょにその野菜を育てているからだろう。たとえば、農園を訪れたときに栽培されていた地カボチャは、北海道のある農家からいただいたものだ。植えてみると、えびすカボチャ、芳香カボチャ、黒カボチャなど5種類くらいの形質がでてきて、そろわなかった。捨てようかと思ったという。

岩崎さんの農園には全国、世界から、いろんな野菜の種が集まる。私が訪れた日も、伏見甘長トウガラシや満願寺ピーマン、雲仙こぶ高菜、九条ネギといった在来種・固定種だけでなく、アメリカからやって来たカラーピーマン、サンフランシスコからやって来た縞のきれいなトマト、ブラジルからやって来たワイルドなナス、韓国からやって来た苦い食用タンポポなど、数多くの種が育てられていた。新たにもらった種は、数年はつくってみるが、「気に入らなければ捨てる」。だから、この地カボチャも捨てようかと思ったというのだ。

しかし、ちょうどそのとき、地カボチャをいただいた農家が病気となってしまったのである。岩崎さんがつくらなければ、その地カボチャは失われてしまうことになる。それにこめられた歴史や物語、それを育ててきた人の想いといっしょに。そして、岩崎さんは、その地カボチャをつくり続けることを決心した。

岩崎さんが大切に育てている雲仙こぶ高菜についても同様である。雲仙こぶ高菜は、大きく成熟すると茎(葉柄)に親指大のこぶができる珍しい高菜だ。地元で種子屋さんを営んでいる峰真直^{ふるとし}さんが、戦争が終わったときに中国から持ち帰った種である。吾妻町の特産にしようと町の経済課の職員といっしょに、峰さん宅を訪ねた。峰さんはすでに亡くなっていたが、奥さんの手によって原種の種が残されていたのである。岩崎さんは、「峰さんがこの種子の中に生き続けているように感じる」²⁾と言う。

岩崎さんの畑はそんなエピソードであふれている。いつ、どこで、誰からその野菜を手に入れたかちゃんと覚えているのは、そんな理由からだろう。

取り返すことのできないもの

岩崎さんには、常に心配事が一つある。「種切れ」である。岩崎農園を訪れたときに栽培していた種採り用のニンジン¹⁾は、再来年に播くためのものであった。換言すれば、2年分の種を貯蔵しているということだ。それでも、岩崎さんは「種切れが怖い」という。

それを聞いて、私は「経営が成り立たなくなる」なんて理由を想像したが、そうではない。その野菜・種にこめられた歴史や物語、それを育ててきた人の想いが、すべて失われることを恐れているのだろう。種切れは、岩崎さんにとっても、そして人類にとっても、一度失われたら決して取り返すことのできない損失なのである。

岩崎さんが在来種や固定種の種のネットワーク運動を広げている理由の一つは、一度失われたら、決して取り返すことのできない損失を防ぐことにあるのではないか。そして、仲間がいるから種を守ることができるのだと言う。そんな話をした後、岩崎さんは複雑な表情で言う。

「長崎五寸というニンジンは本当に絶えてしまった。でも、それらしきものは、遺伝子組み換えで創り出すことができるらしいんですよ」

種を残そうと苦労を重ねている岩崎さんの表情と言葉には、それに近いものを簡単に復活できる先端技術に対する問題意識や哀しみがにじんでいた。

3 多様性をみつめる

多様性を守る、多様性で守る

岩崎さんは種採りを始めた当初、自分の望む形質にそろえようと厳しい選抜を重ね、純度を高めていった。岩崎さんらしい表現であるが、「美しい女性的な姿」の野菜を選んだそう。しかし、5年もすると、その作物の生命力は低下し、種が採れなくなった。

岩崎さんは、「種採りを間違った視点から見ていた」と振り返る。種採りは純化するプロセスだと思っていたが、こうした経験を経て、「多様性のなかに

生命力が宿る」ことをつかみ取る。

「美しいと思って選ぶダイコンの中に、元気なダイコン、わたしはこれを男ダイコンと呼んでいるが、それを何本か混ぜておく。男ダイコンは生命力の強いダイコンだから、それを混ぜることでダイコンが同じものだけでなく、多様性が保たれ種子が毎年採れる」⁴⁾

岩崎さんは、「伝統野菜などを育てよう、守ろうと思えば、育種という方法は用いることができない」、逆に「多様性を守る、集団を守ることが大切だ」という。育種、つまり厳しい選抜を重ねれば、伝統野菜の特徴である生命力が失われてしまい、逆に、多様性を守ることがその種の生命力を守ることになるということだ。種の多様性を守り、多様性で種を守る、「それが植物の世界」なのだ。

「私も昔は、つつい、よりのよいのものがほしいと追求して、植物の純化をすすめようとした。それは自分の欲、人間の欲の表れだった」

岩崎さんは、この経験を自己批判にまで深めていく。

多様性をつかみ、多様性の本質を知る

岩崎さんの植物、多様性に対するまなざしは、さらに深まっていく。

「個体は同じだと思っていたが、個体の個性が見えてくる。これはスゴイですよ」

同じ種でも、個体ごとの個性や長所・短所が見えてくるのだという。

「いやー、岩崎さんのほうがスゴイですよ」と、心からそう思う。

そんな岩崎さんの人生はさぞ楽しいだろう。たとえば、人とのコミュニケーションは人それぞれに個性があるからこそ楽しく、自らに学びと成長がある。そんなコミュニケーションの対象が人だけでなく、植物にも広がっているわけである。同じ畑を眺めていても、私とはまったく違うように見えているし、いろんなものを感じているはずだ。

岩崎さんは、畑の隅で私と話しながら、無意識のうちに、そこら辺の雑草をちぎっては手で揉みつぶし、臭いを嗅いだりしていた。もしかしたら、私とコミュニケーションする間にも、雑草とコミュニケーションしていたのかもしれない。

そして、私をもっとも感心した言葉がこれだ。

「いくら育種をしても、植物の長所・短所はトータルでは変わらないのではないか。どっかを伸ばせば、何かを失ってしまう。長所を伸ばしてやって、短所を農作業でサポートしてやる。それが農業ではないか」

たとえば、生命力の豊かなダイコンを育てていたなら、収量が低下したことがあった。従来どおり肥料をやっていると、葉が茂りすぎて、肝心な根が太らなかつたのだ。だから、ちゃんと肥料の量をコントロールして、収量も維持する。それが農業なのだと言う。

植物とコミュニケーションし、植物の個性を見極め、このような哲学にたどり着いたのだ。岩崎さんに会ってしばらくたったいまでも「うおー、すごい話を聞いた」と興奮しているのであるが、それはもしかしたら農業の世界をよく知らない私だからかもしれないと不安になって、宇根豊さんにこの話をしてみる。すると宇根さんも、「やっぱり岩崎さんはすごいねえ」と感心してニコニコしている。

やっぱり岩崎さんはすごい。種採りという行為そのものや、その技術は言うまでもないが、研ぎ澄まされた植物の多様性に対するまなざしや、そこからつかみ取った哲学がすごい。

4 自ら育む

原点としての雑木林

岩崎さんのすべてのきっかけは「山の畑」にある。山の畑とは、岩崎さんが雑木林を切り開いてつくった8反の畑のことである。だから当然そのまわりは雑木林で、岩崎さんはその雑木林でよく昼寝をしていたという。

昼寝をしながら、自らの力で循環し、自らの力で育つ雑木林のしくみについて考えはじめる。

「自然の雑木林たちはそれぞれが高く伸びながらも、お互いに共生している。そして上の表面は、土が見えないくらいに落ち葉が降り積もり、そのことによって落ち葉の下にふかふかの生きた土を作っている。たぶん雨は、雑木の葉や幹を伝わって落ち葉に落ち、その落ち葉や生きた土を通ることで、植物の成長を促進するすばらしい機能を持った活性水に変わっているのでは…」^[1]

それに、雑木林の伐採に対する後ろめたさと、自らの病気というきっかけが

加わって、化学肥料や農薬を多投する農業から、有機農業へと切り替えることになる。

岩崎さんの話を聞いていると、「有機農業と種採りはどっちが先？」と誰もが疑問に思うだろうが、それは間違いなく有機農業が先である。無農薬・無化学肥料の有機農業を行うには、生命力のある種が必要になり、それを確保するために種採りを始めたというプロセスである。

岩崎さんは有機農業に切り替えるなかで、種の重要性に気がつく。

「大手種苗会社作り出している新しいF1交配種は、収穫量が多く、耐病性も強く、大きさ、形が非常に揃う品種が多い。しかし、交配種の野菜を育てて思うことは、とにかく肥料を多量に必要とすること」^[1]

化学肥料を多投しない有機農業には、生命力を有する種が必要なのである。

「昔ながらの野菜、在来種や固定種と呼ばれる野菜は、根が自分で上の養分や水分を探そうという力がある。上には本米、様々な養分があるわけですから、それらを探して根がどんどん伸びていく。これを生命力といっているわけですが、根が自分の力で伸びて必要なものを吸収するんです」^[1]

こうして有機農業を可能にする、生命力の豊かな種、在来種や固定種の種を確保するために、種採りを始めたわけである。あくまでも生産のための種採りが基本なのだ。「川の縁で育っていた赤ダイコンを持ってきて、植えて花を咲かせてみたり、道路ぎわに生えていたダイコンを抜いて植えてみたり」^[1]、という、一見、趣味にしか見えないこともやっている。だが、「荒れ地の中で花を咲かせ、種子を落としてと、その繰り返しの中で生きている強い野菜を探しているのです。そんな野菜は、その地に適応した生命力あふれた野菜に変わっています」^[1]と、生命力の豊かな野菜の種採りの一環なのである。

目標としての雑木林

そして、この山の畑が、岩崎さんに新たなきっかけを与えた。山の畑の隣りに、地域の共同堆肥舎ができたのである。堆肥の素材は、椎茸のはだ木、ブロイラーの鶏糞などだ。

風向きによっては悪臭がひどい。農業改良普及センターに相談したところ「臭いは野菜に影響しない」との返事が返ってきた。その一方で、自然農法を行っている知人は「アブラナ科の野菜はつくれなくなる。アンモニア臭にいろ

んな虫が寄ってくるから」とアドバイスしてくれた。とはいえ、これまで有機農業をやってきたのであるから、堆肥を否定・批判はできないし、したくない。でも「畑がかわいそう、守ってあげたい」とも思う。

そこで、もう一度、自らの有機農業の内容を吟味しはじめる。そして、循環的な農園の実現、畑に外部から有機物を入れない有機農業への挑戦を始めた。この共同堆肥舎は神様が与えてくれたきっかけだという。

岩崎さん自身も、以前は無肥料で野菜をつくることに疑問と限界を感じていたと言うが、最近はずだいに、それに自信をもちはじめている。大豆などの豆科の作物や緑肥を輪作体系に組み込んだり、野菜と豆科植物を交互に植えるインタークロッピングによって、地力を維持しようとしている。源助ダイコンなどは、これで十分に育つ。逆に、在来種・固定種を有機で(堆肥を用いて)つくると、暴れる(葉が茂りすぎる)ほどだという。

一方で、カボチャなど肥料を必要とする野菜は、上述の方法では限界がある。野菜が小さくなり、いずれ採れなくなる。どのような豆科植物が効率よく窒素を固定するか、岩崎さんの作物の栽培サイクルに適しているか、模索し、挑戦し、悩んでいる最中なのである。

そして、何よりも種である。

「種子を生命力あふれるものにすれば、無肥料の状態でも元気に育っていくことが体験からわかってきた。健康な野菜を作るには、生きた土に、生命力あふれる種子をまく、この二つの組み合わせで、素晴らしい関係が保たれていくと思う」^[1]。

岩崎さんの原点である雑木林を畑の中に再現しようという挑戦は、深まっていく。

5 農法をとらえる

欲深く、俗な私には、岩崎さんの深意を十分に理解できていないかもしれないが、岩崎さんの農法に対する考え方はこうだ。

生産を高めようとする技術は果たして農法だろうか。「もっと採りたい」「生産を高めたい」とするのは、人間の欲でしかないのではないか。農法とは、そんな欲が排除された無の状態ではないか。農法とは、感じること、感動するこ

とではないか。

種を採ろうとすると、美しい花に出会える。野菜にとって花を咲かせたときが最高のときで、そこから先にいろんな世界が広がっている。その花と語る。末期を見届ける。野菜の一生とつきあうわけである。そこから本当に多くのことが学べる。花を解き、種を解く。そうして全体が見えだしたときに、農業が理解できる。野菜の一生とつきあうようになってよかったと思う。それらはたしかに経済とは結びつかない世界だけど、それこそが本当の農法ではないか。

そして、1年という野菜の一生が積み重なっていく。

中国からやって来た紅苜^{こうしん}という野菜。名前のおり中が赤いダイコンだが、その色には当たりはずれがあり、なかなかそろわなかった。15年つくり続けて、やっと8割程度、色がそろうようになった。15年の繰り返しのなかで、野菜が環境に適応しよう適応しようとして、やっと適応できたのである。人の時間と植物の時間とは違う。それでも、その野菜は、その人の思いをかなえようと、すこし遅れながらも後からついて来ている^[2]。この15年間を本当によかったと思える。そして、また見えなかった世界が見えだす。

岩崎さんは、こんな話をしながら、優しいまなざしを畑で育つ野菜におくる。

同行した学生に、「一番印象的だったことは？」と聞くと、「岩崎さんの笑顔」と即答した。「これだけのいい話を聞きながら…」と、一瞬、思ったが、まったくそのとおりなのである。歴史と物語と想いを受けとめ、花と語り、種をあやし、多様性の本質をとらえ、感動にあふれた毎日をおくる岩崎さん。その笑顔は本当に素敵なのだ。

《参考文献》

- [1] 岩崎政利『岩崎さんちの種子採り家庭菜園』家の光協会、2004年。
- [2] 岩崎政利「たねとりから見えてくるものは」(『農を変えたい!3月全国集会』2006年3月25日、日本青年館での発言メモ)。